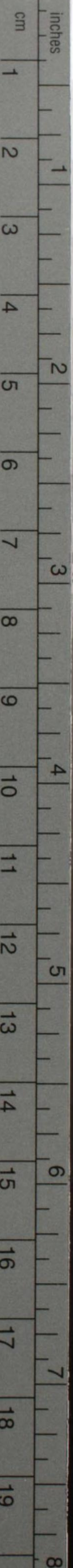


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



026.
Te147z
2/

善本寫真集二十一

曲亭馬琴

天理圖書館

026-Te147z



*00629395 *

026
Tel 4.73

目次

| | | | |
|---|---------|---|----------|
| 一 | 肖影 | 二 | 兎園小説 |
| 二 | 書幅 | 三 | 近世物之本江戸記 |
| 三 | 加古川本藏綱目 | 四 | 作者部類 |
| 四 | 敵討誰也行燈 | 五 | 後の爲の記 |
| 五 | 皿郷談 | 六 | 書翰 |
| 六 | 朝夷巡島記全傳 | 七 | 水滸後傳 |
| 七 | 南總里見八犬傳 | 八 | 聞まゝの記 |
| 八 | 姫萬兩長者鉢木 | | |
| 九 | 羈旅漫錄 | | |



629395
629394

わが古典小説の山なみに、いづれか最高を指すとならば、さきの源氏物語にならべては江戸時代に八犬傳がある。五十四帖に對する壹百零六冊といった比較だけで勿論ない。褒貶の基準を、物のあはれと勸善懲惡などいふ教條にのみ求めることのむなしさから、われ／＼の文學史は最早自由であらねばならぬ。

本館は、西莊文庫本を中心に些かの馬琴資料を藏するが、その若干を選び、ほど類に分ち年次に按配し、こゝに曲亭馬琴の一集を編んだ。

瀧澤氏、名は解、始め興邦。通稱清右衛門、後に左吉又は瑣吉を稱し、篁民・蓑笠漁隱・飯臺陳人・玄同など號して室を著作堂といひ、曲亭馬琴はその戲號である。明和四年（一七六七）江戸に生れ、嘉永元年（一八四八）一月六日歿、享年八十二歳。小石川若荷谷深光寺に葬つた。法名、著作堂隱譽蓑笠居士。



一 肖 影

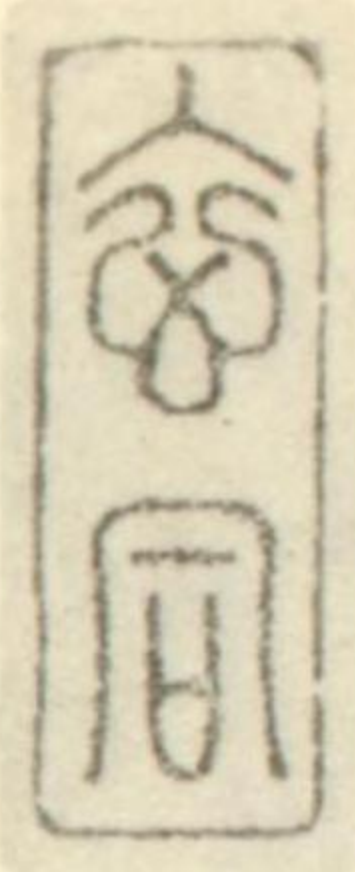
版元丁子屋平兵衛に同道、畫工香蝶樓歌川國貞が四谷信濃坂に著作堂を訪ねたのは天保十二年九月十六日のこと、來春賣出し八犬傳最終回の回外剩筆口畫に載せる作者の姿繪を寫生するためである。この畫像を、世間では眞に逼るといひ、家人は左程も似ないと評判したが、時に馬琴七十五歳、兩眼既に病衰して、自身その當否の程をさへ辨じ得なかつたといふ。國貞筆馬琴像は木村默老の戲作者考補遺にもみえ、老馬琴を描くもの他に谷文二筆があつて、それ／＼相通ふところあり、共にほゞ傳眞と考へてよい。

圖版は、八犬傳所掲、國貞描くところの、書齋に於ける著作堂主人。床間の歌軸は自作の舊詠、友人でもあつた書家松本董齋の揮毫である。

寫し見する鏡に親のなつかしき

わか影なからかたみとおもへは

二書 幅

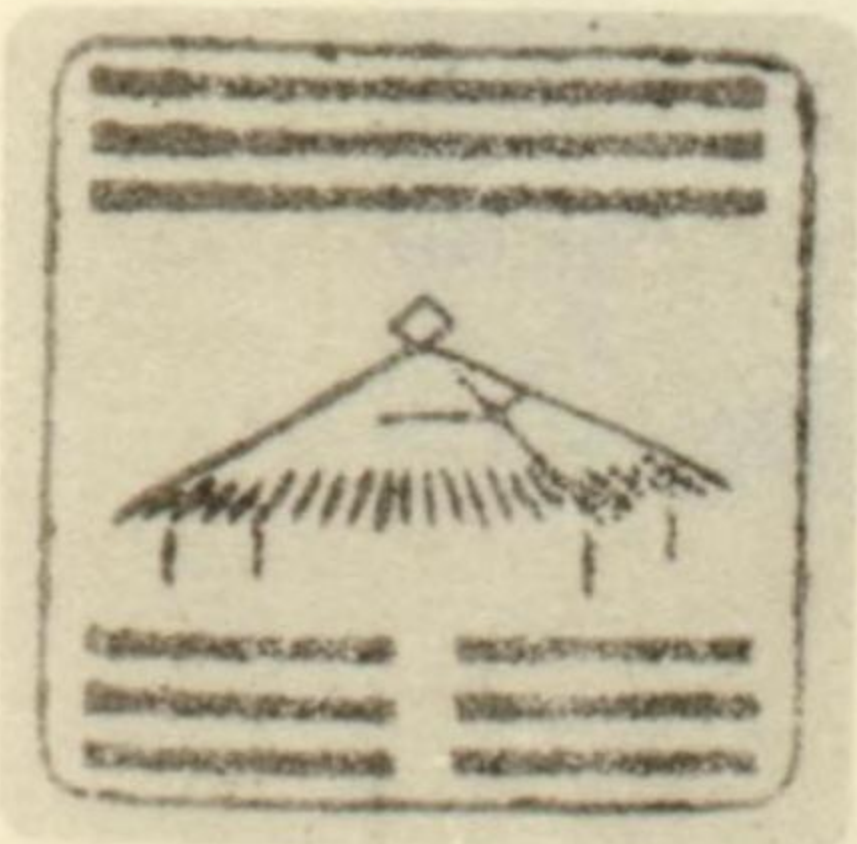


かつて書を橘千蔭に學び、著作のかたはら寺小屋を開いたこともあつたが、のちには独自の風格を具へるに至る。同時代の人中村佛庵の評に曰、結形取態、鈎勒婉健、駿馬轉韁之勢云々。書家の巧みはみられぬが、むしろ實用で鍊りあげた堅實の文字といふべきであらうか。

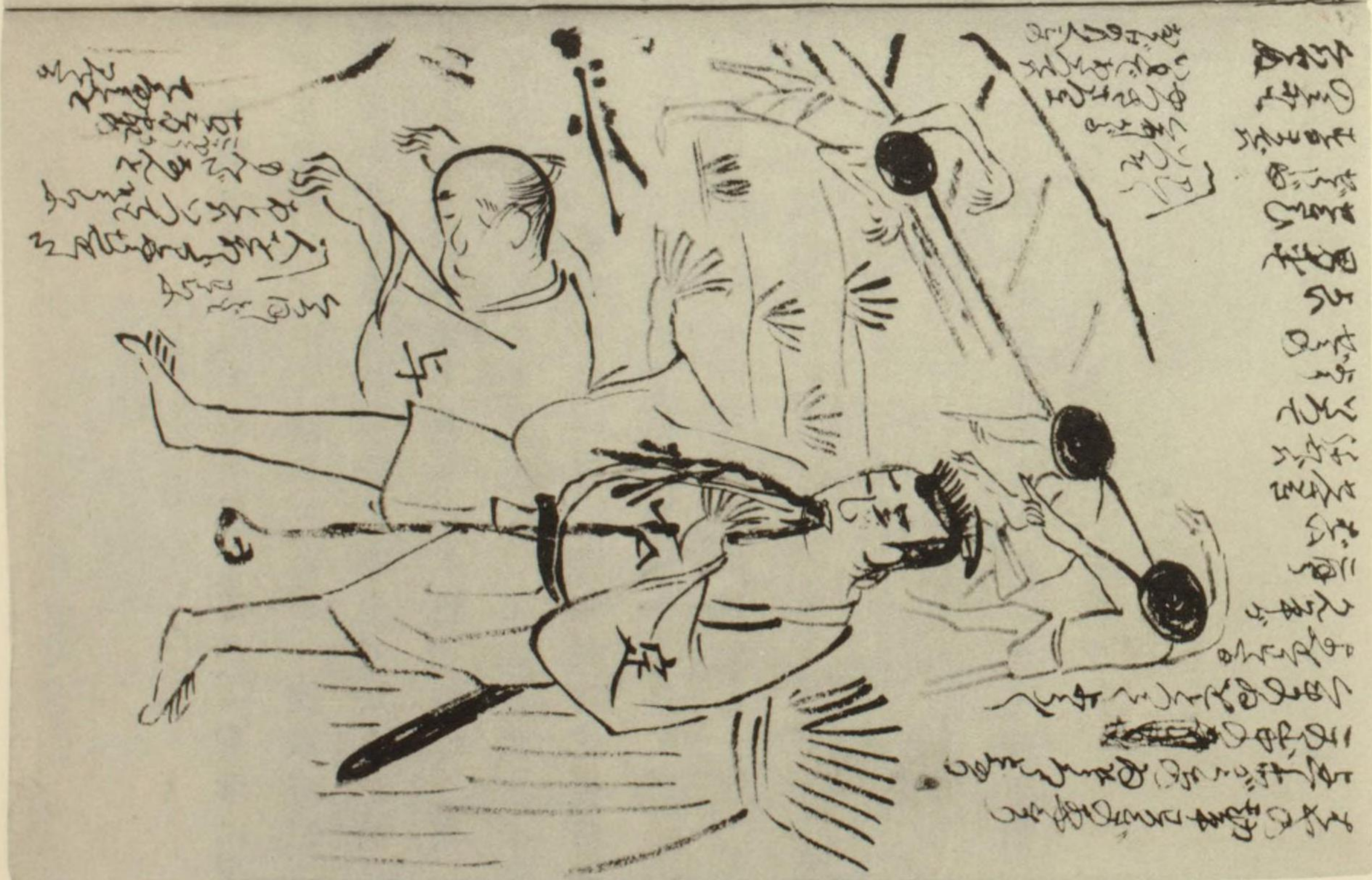
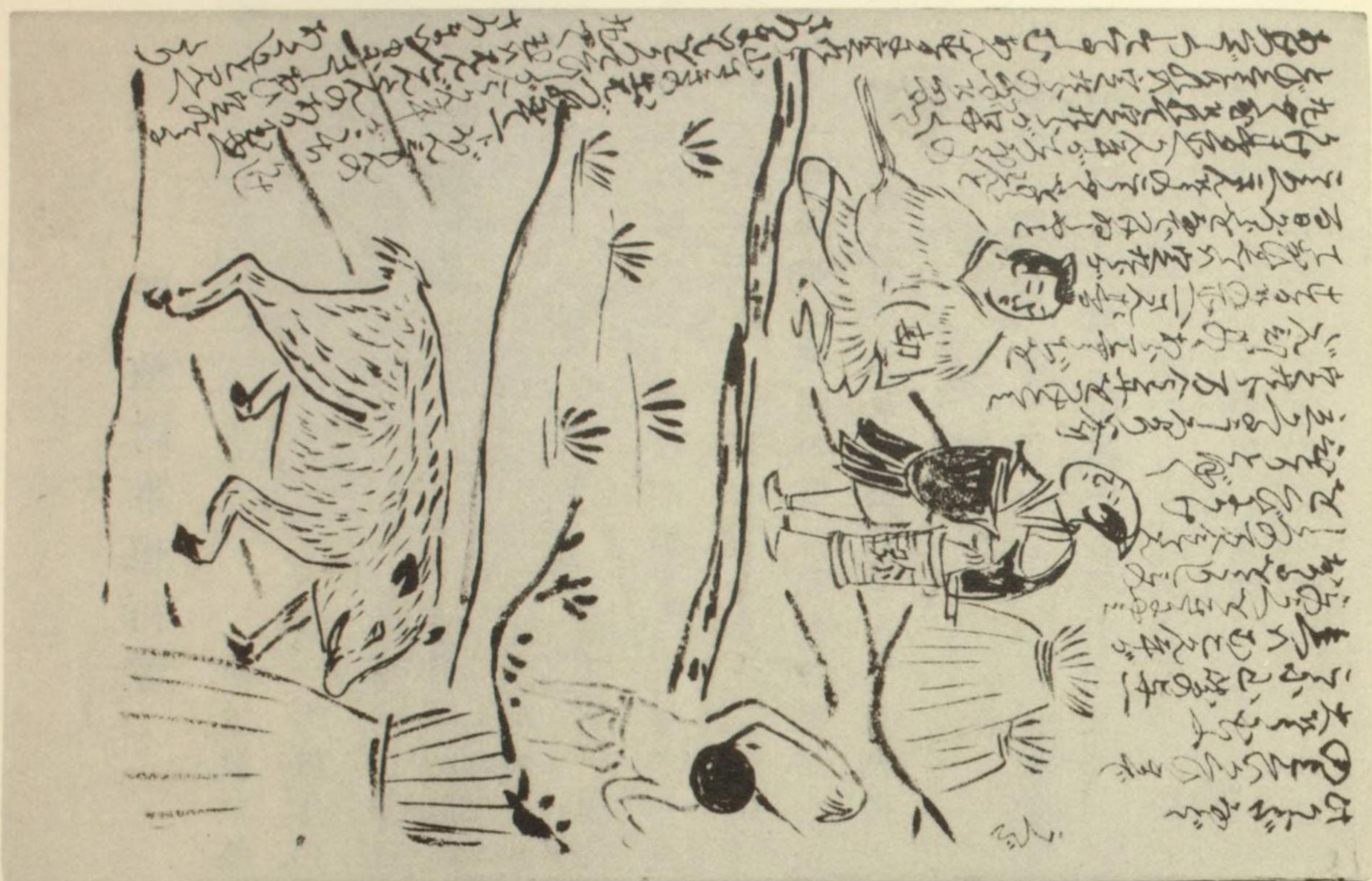
掲上の一幅は紙本、縦一米二十六糎、横三十三糎。知友小津桂窓に與へた天保六年の歲旦試筆である。桂窓、名は新藏、通稱與右衛門、伊勢松坂の素封で、西莊文庫を營み、後年曲亭文庫藏書の多くを得てその方面の資料は特に豊富であつた。

咱著每篇創自春。硯池氷解憚年新。山殘白雪輝書籟。野富青陽梅信臻。舞蝶初生南庭草。鶯歌舌熟北園筠。昇平日永多遊樂。還恥虛名偷食民。かくれてもなほあたりきみの笠の名はあらはれしあめの下はも

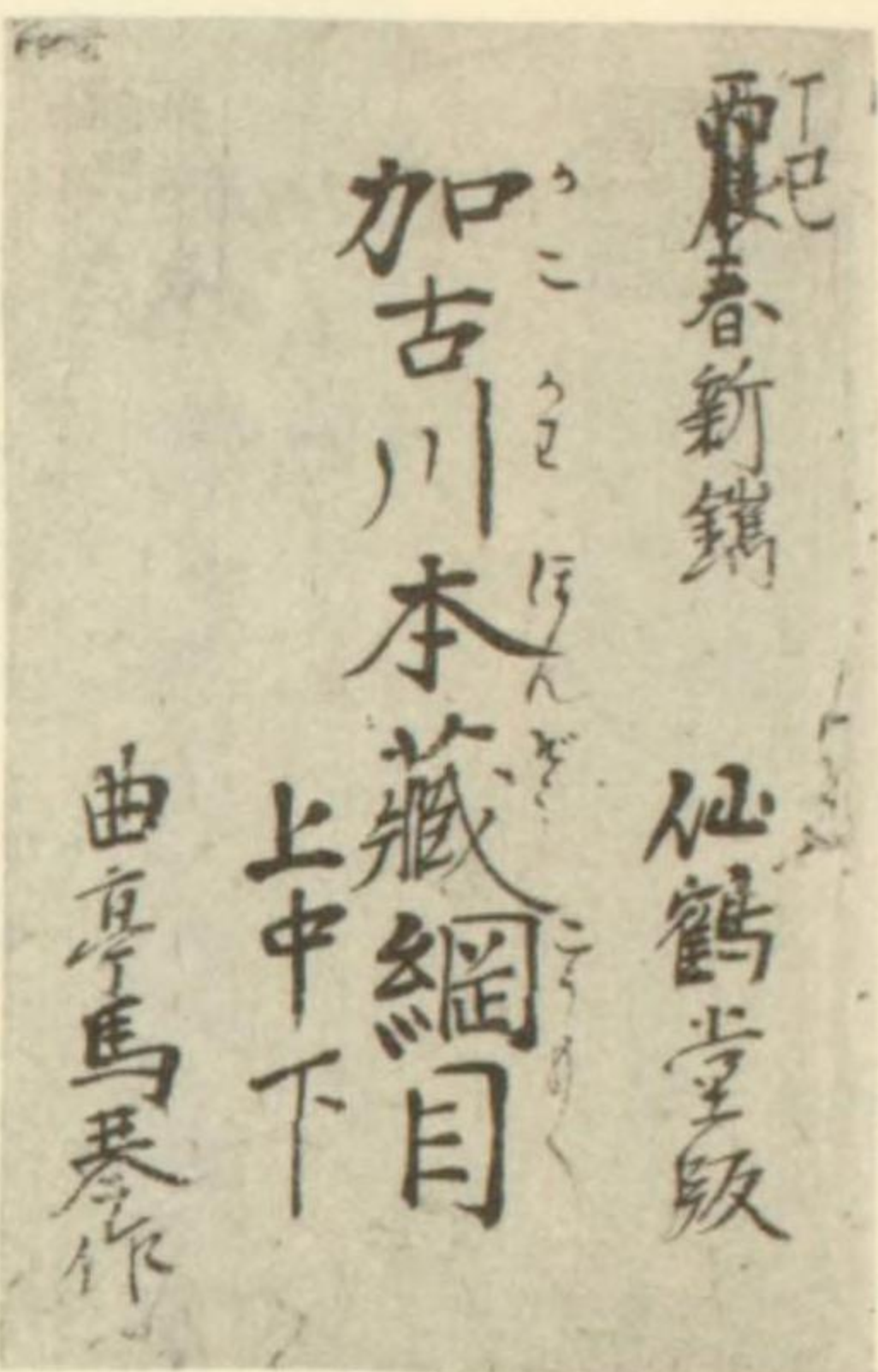
天保乙未端月之吉試筆於玄同書屋時年六十九 蓑笠漁隱印
カッタは關防印「玄同」と落款「蓑笠隱居」及び
乾坤一草亭印、共に原寸大。



咱著每篇創自春硯池氷解憚年新山殘白雪
輝書籟野富青陽梅信臻舞蝶初生南庭草鶯歌
舌熟北園筠昇平日永多遊樂還恥虛名偷食民
之後、每篇、初、生、南、庭、草、鶯、歌、
天保乙未端月之吉試筆於玄同書屋時年六十九 蓑笠漁隱



三 加古川本藏綱目



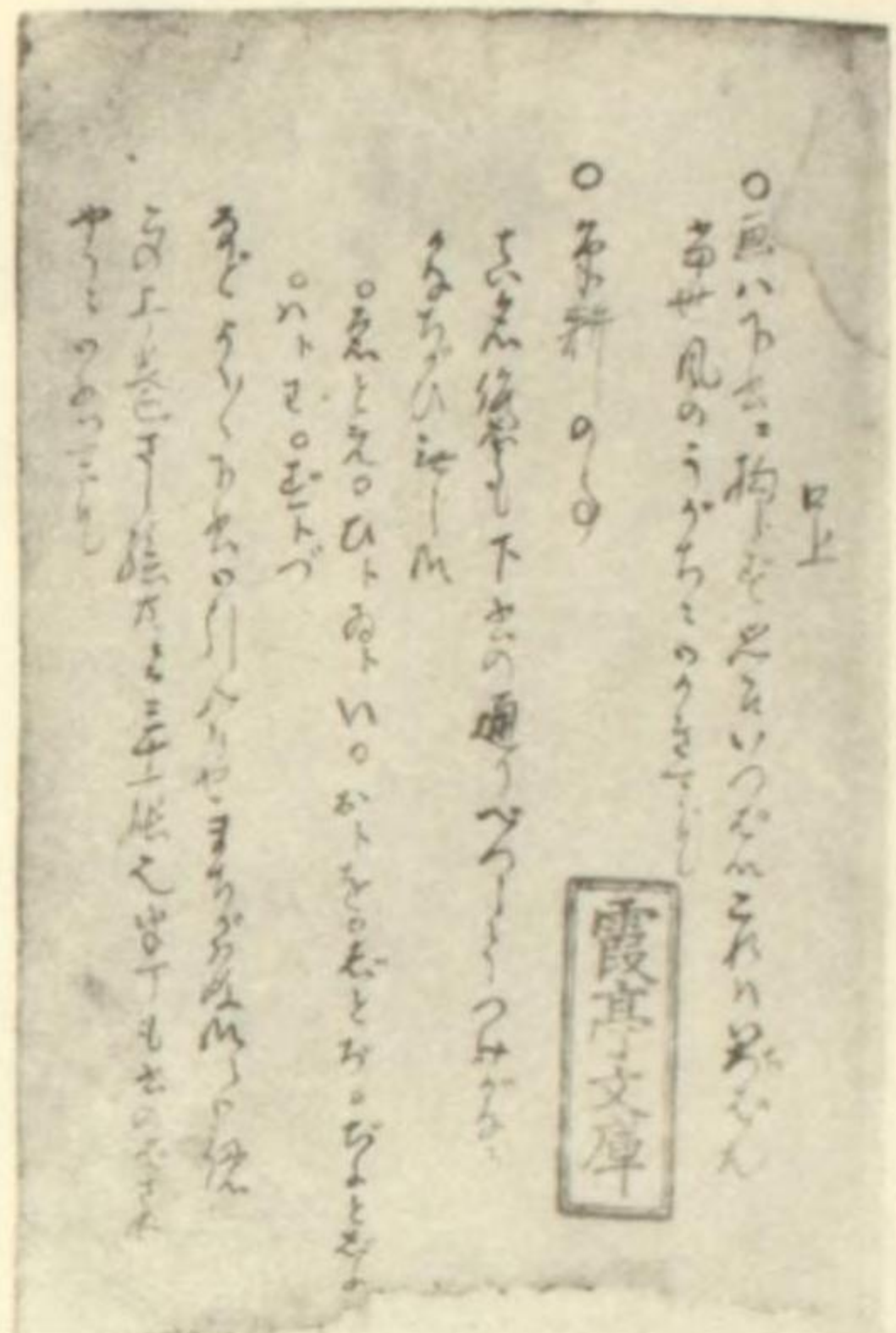
黄表紙稿本。輕妙の行文と繪心の有無が命のこの種文學にあつて、よし黄表紙作者として文壇に登場したとはいへ、畫文とも、馬琴の才必ずしも上々だつた譯でない。當時、黄表紙自體既に衰退期にあり、事實この分野に於ける彼の作品は次第に少なくもなつてゐる。

圖版は見ての通り忠臣藏五段目山崎街道二ツ玉の段。勘平は舅與一兵衛に居候して熊膽とりの獵人暮し、與一兵衛が娘お輕を賣つた身代金が萬金丹なら、勘平の打つた鐵炮玉も丸藥玉、何から何まで本草づくめの洒落である。

—これ按ずるに、山崎の出入れで一ト盆三文の薩摩薯を喰つたせいで、勘平が打つた丸藥玉は反魂丹の赤玉故、薩摩薯に差合ひあつて定九郎にあたりしとみへたり—といふのが落ちで、世界を忠臣藏にとり、心學仕組の善玉惡玉に本草を緘へませた趣向。

掲出本は縦十八糎、横十三糎の小本一冊。上中下三卷、各卷五丁計十五丁の仕立はすべて黄表紙の定型である。カットは表紙。寛政七年九月脱稿、來春丙辰に新版賣前のところ、一年遅れて翌丁巳九年、通油町仙鶴堂から北尾重政の畫で上梓された。

四 敵討誰也行燈



中本讀本稿本。文學史では讀本に所屬するが、書形により、半紙本のもと區別して中本讀本といひ、冊數も二、三冊のことが多く、文章と挿畫の分離も完全でない。筋は讀本的に複雑であるが、小冊故、例へば本書の跋に「長い話は九さつまでも行くべきものを二冊にして五月限りに請合」といつた、構成上の無理が生れる。元來長篇的性格をもつ讀本の形式としては不適當で、初期作品を除き、この種のもものは馬琴にも多くない。

掲出本は縦十九・五櫃、横十四・五櫃の中本上卷一冊。文化二年六月に脱稿したが、翌三年、一陽齋歌川豊國の畫で鶴屋金助から上下二冊で賣出された。

カットは著者から版下筆耕にあてた朱書きの注意書。

口 上

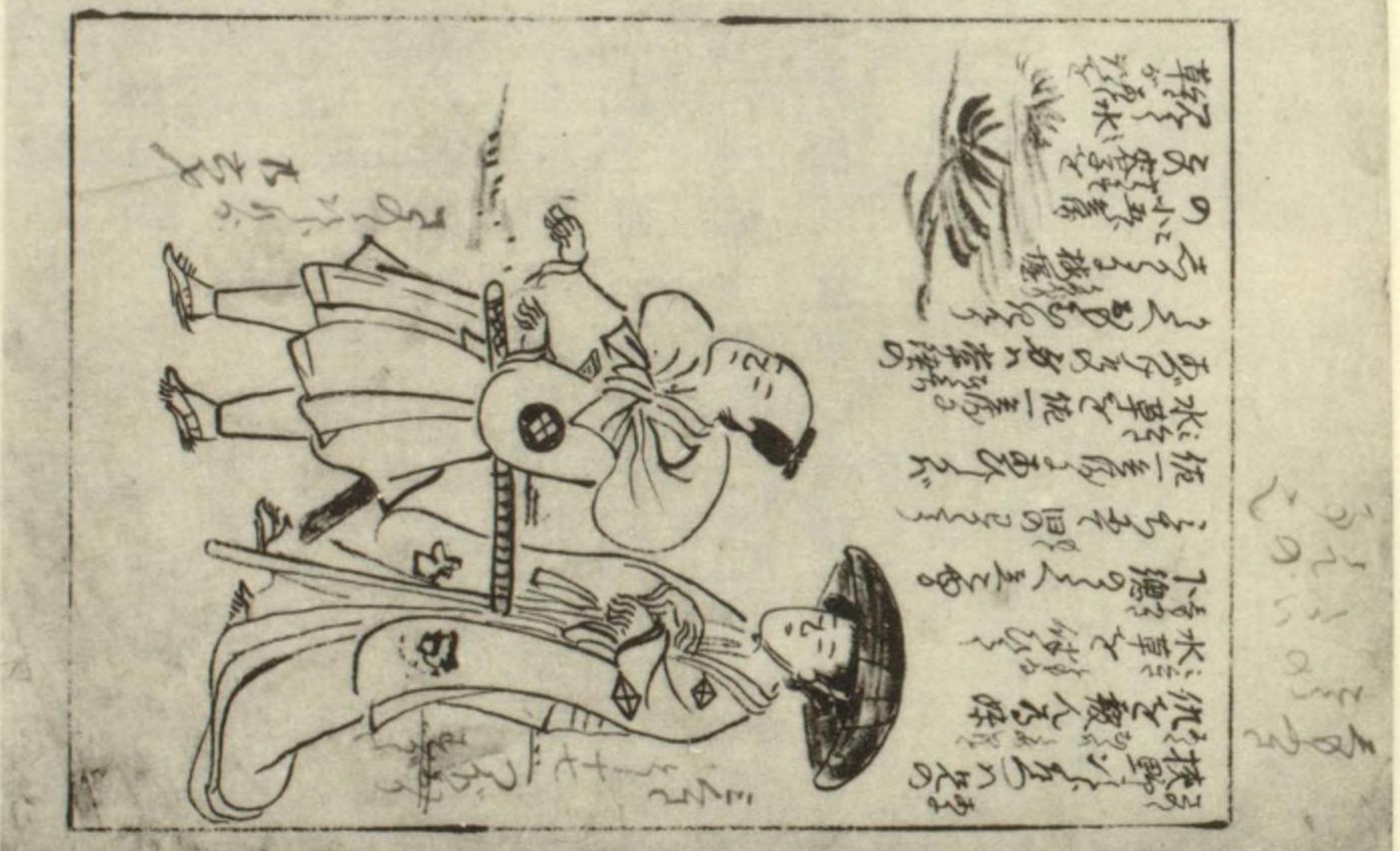
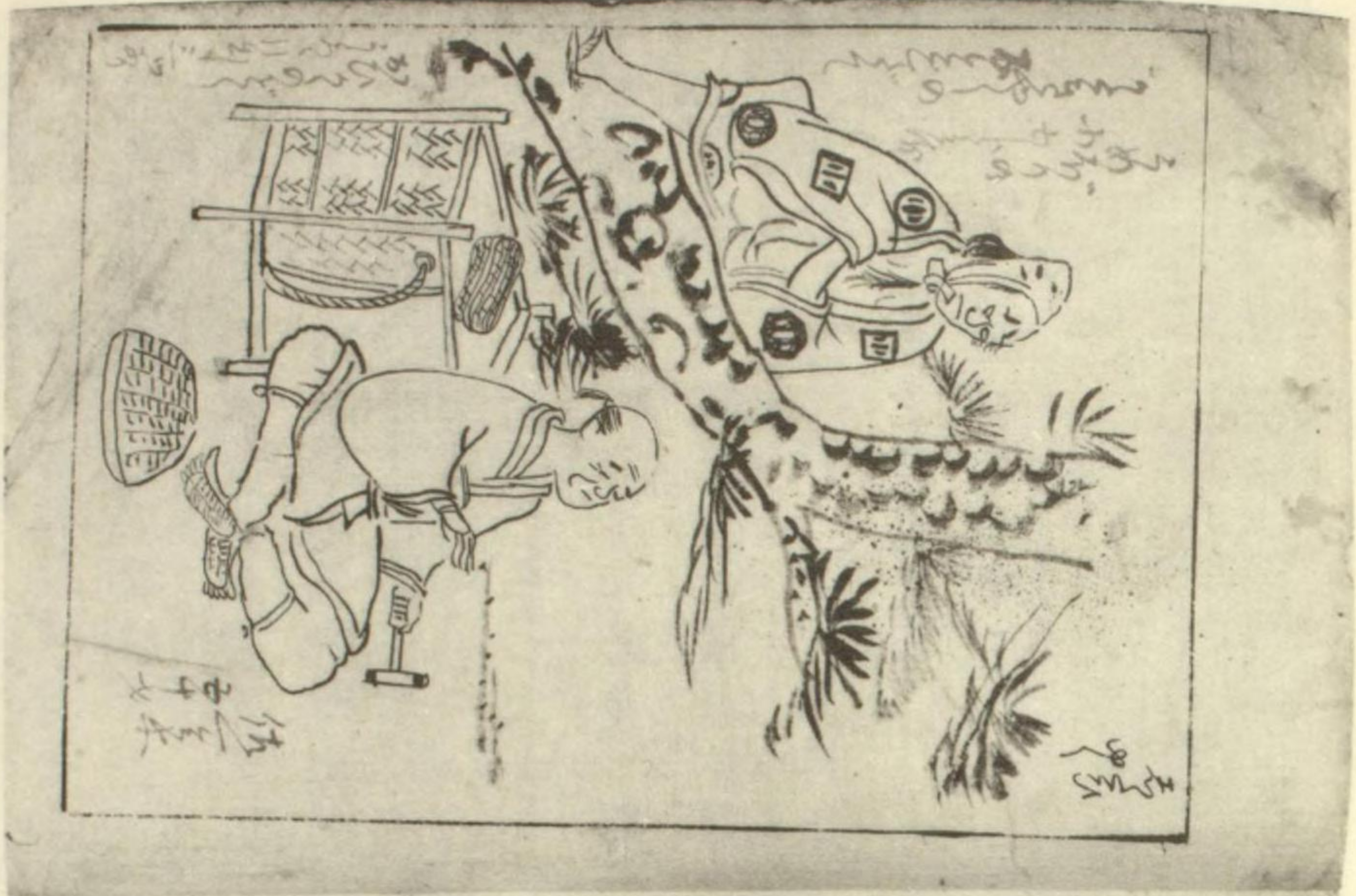
○画ハ下書ニ拘らず思召いつばい、これハいちばん當世風のうがちニ御かき可被下候。

○筆耕の事 眞名假名とも下書の通り、べつしてつけがなニかなちがひ無之様。

○ゑとえ○ひとゐとい○おとを○じとち○ちよとじよ○ハトわ○ザトづ

などよくく下書御引合せ、まちがハぬ様ニ御認。

この上ノ巻、さし繪共ニ而三十一張也。半丁も書のばさぬやうニ御書可被下候。



敵討誰也行燈卷之上 馬琴撰述
 第一編 隠名のはなを唄ひし者
 卷之六 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之七 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之八 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之九 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之十 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之十一 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之十二 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之十三 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之十四 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之十五 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之十六 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之十七 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之十八 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之十九 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之二十 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之二十一 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之二十二 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之二十三 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之二十四 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之二十五 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之二十六 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之二十七 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之二十八 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之二十九 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之三十 月夜に隠名のはなを唄ひし者
 卷之三十一 月夜に隠名のはなを唄ひし者

五皿々郷談

讀本校正本。木版時代の書物は、筆耕の誤寫や彫手の誤刻などで、校正に随分手数をかけたやうである。馬琴の場合、版下校正は自身行ふが、刷りゲラには、倅宗伯、後には嫁のお路までがその手助けをしてゐる。大概二乃至三校が普通で、二番校合とか三番校合とかいつてゐるが、手爾波違ひや悪彫りについての愚痴が、日記・手紙のあちこちにみえるのも、このことに餘程手を焼いたからであらう。

掲出本は天地に多少截斷があつて、縦二十四櫃、横十七櫃、五卷六冊の半紙本合三冊で、木蘭堂榎本平吉版元、松平・榎總との合版である。北齋畫、筆耕・刻工ともに奥附に名を載せる程の上手であつたが、それでも書損じや彫崩しなど甚だ見苦しく、卷を追ふて仕事も次第に雑になつてゐる。馬琴は自筆で逐一朱書校正したのであるが、そのところは改めて埋木で訂正しなければならぬ。文化十年序、原刻刊記に文化甲戌十一年春とあるのを、朱校正では十二乙亥年と改めてゐる。全盛の作者馬琴のものとても豫定通りに出ぬことは多かつたのである。

カットは本書に捺された「瀧澤」の墨印で、原寸大。



五皿々郷談

讀本校正本。木版時代の書物は、筆耕の誤寫や彫手の誤刻などで、校正に随分手数をかけたやうである。馬琴の場合、版下校正は自身行ふが、刷りゲラには、倅宗伯、後には嫁のお路までがその手助けをしてゐる。大概二乃至三校が普通で、二番校合とか三番校合とかいつてゐるが、手爾波違ひや悪彫りについての愚痴が、日記・手紙のあちこちにみえるのも、このことに餘程手を焼いたからであらう。

掲出本は天地に多少截斷があつて、縦二十四櫃、横十七櫃、五卷六冊の半紙本合三冊で、木蘭堂榎本平吉版元、松平・榎總との合版である。北齋畫、筆耕・刻工ともに奥附に名を載せる程の上手であつたが、それでも書損じや彫崩しなど甚だ見苦しく、卷を追ふて仕事も次第に雑になつてゐる。馬琴は自筆で逐一朱書校正したのであるが、そのところは改めて埋木で訂正しなければならぬ。文化十年序、原刻刊記に文化甲戌十一年春とあるのを、朱校正では十二乙亥年と改めてゐる。全盛の作者馬琴のものとても豫定通りに出ぬことは多かつたのである。

カットは本書に捺された「瀧澤」の墨印で、原寸大。

五皿々郷談卷之一

東都 曲亭馬琴編演
 萬松院足利義晴公將軍より時武家第一の執權右京大夫高國の横難
 左京大夫晴元をこれに京都の西管領のひろの柳高國の式部大夫
 せり又晴元の前
 のまを廣く威權
 國時元確執
 夏六月撰傳
 地自校をりし
 たり

編述 著作堂馬琴稿本

淨書 石原 神田 千形 仲道

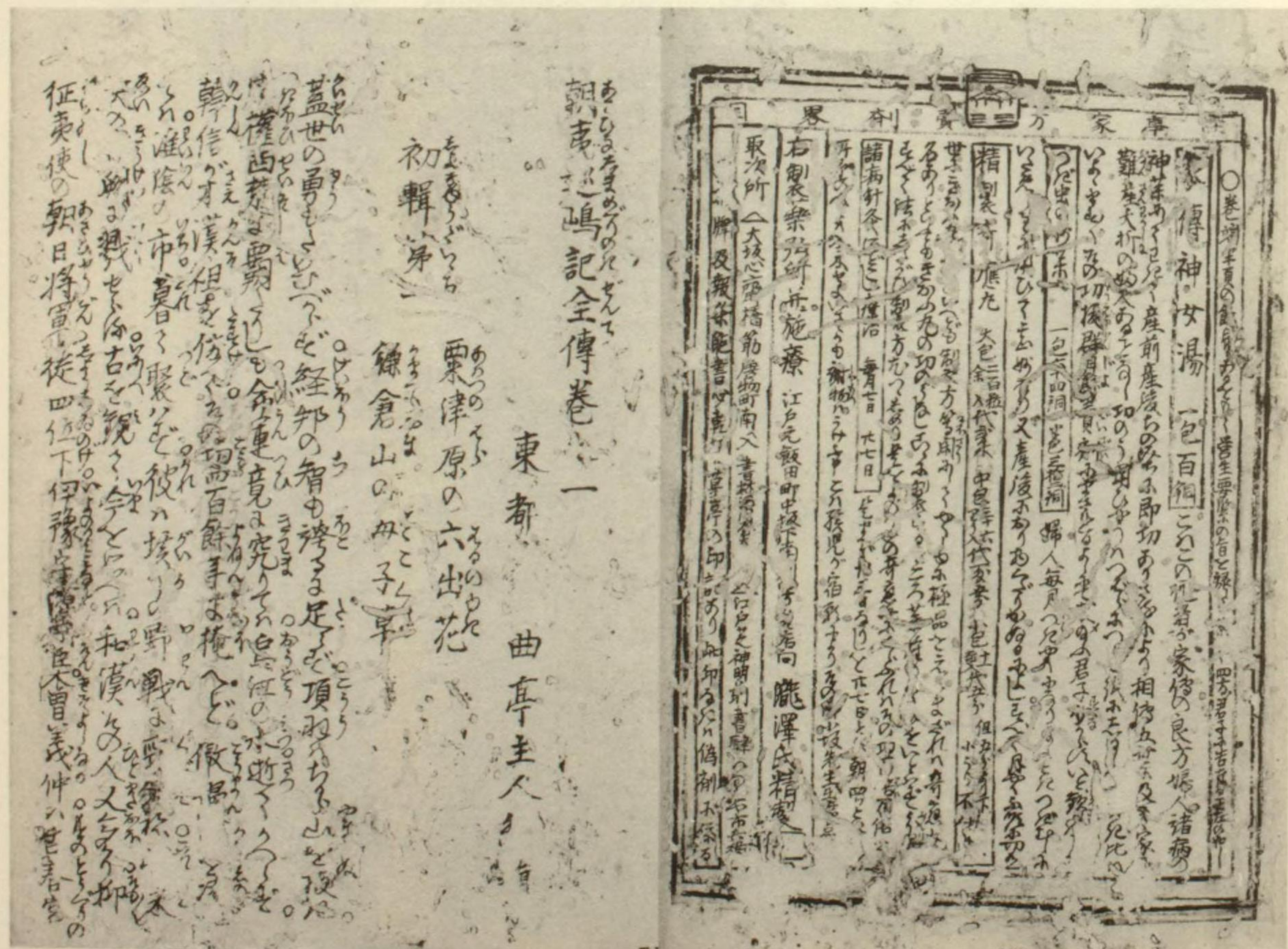
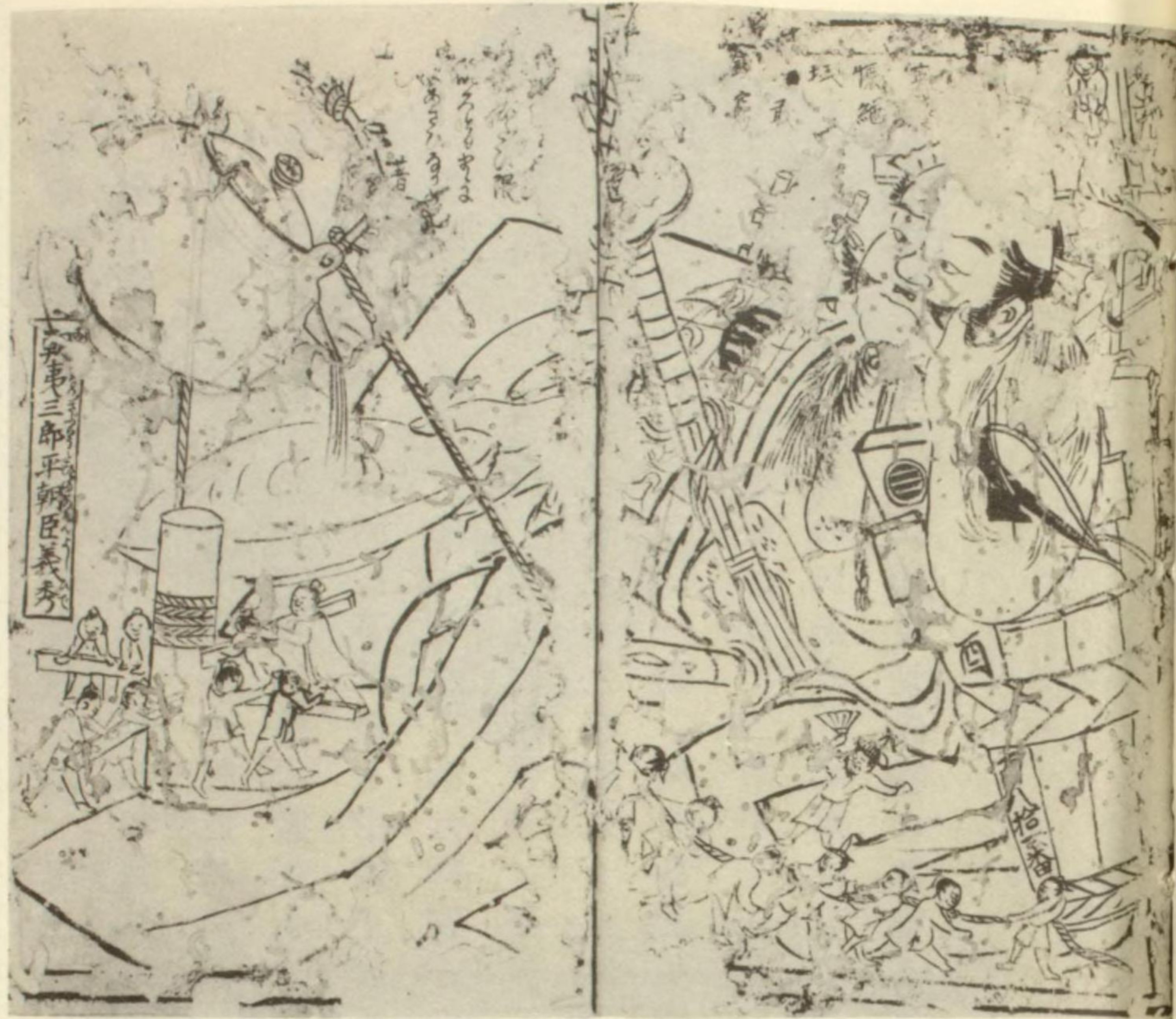
画匠 前北齋載斗筆

刷人 朝倉 伊八 木村 加兵衛

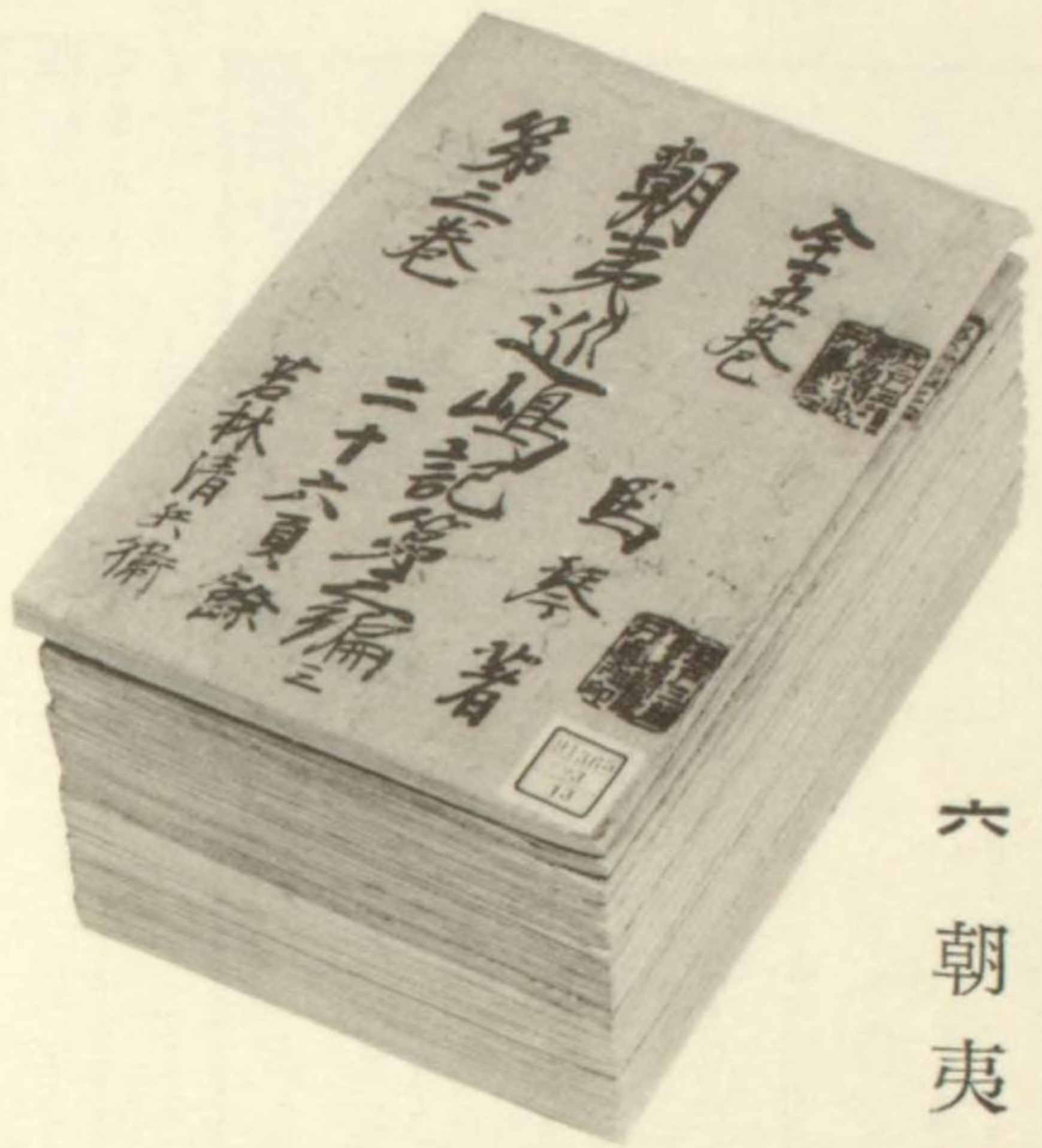
○著作堂編述出像國字小説目次 書肆木蘭堂藏版
 三七 金傳 前北齋画 全六卷
 白夢 前柯 後記 同 画 前後八卷
 飯殿 實々 記 豐廣画 前後十卷

常 夏 草 紙 春亭画 全五卷
 綱 櫻 春 蝶 奇 綴 豐清画 前後八卷
 血 血 御 談 前北齋画 分卷六冊
 朝 表 巡 嶋 記 史 初編五卷
 朝 比 奈 勇 力 鑑 北齋游著 古版六卷

文化五年 江戶 松本平助
 歲次甲戌 深川森下町長慶寺前
 春 榎本惣右衛門
 正月 上浣 同所木蘭堂
 發兌之記 榎本平吉梓



六朝夷巡島記全傳



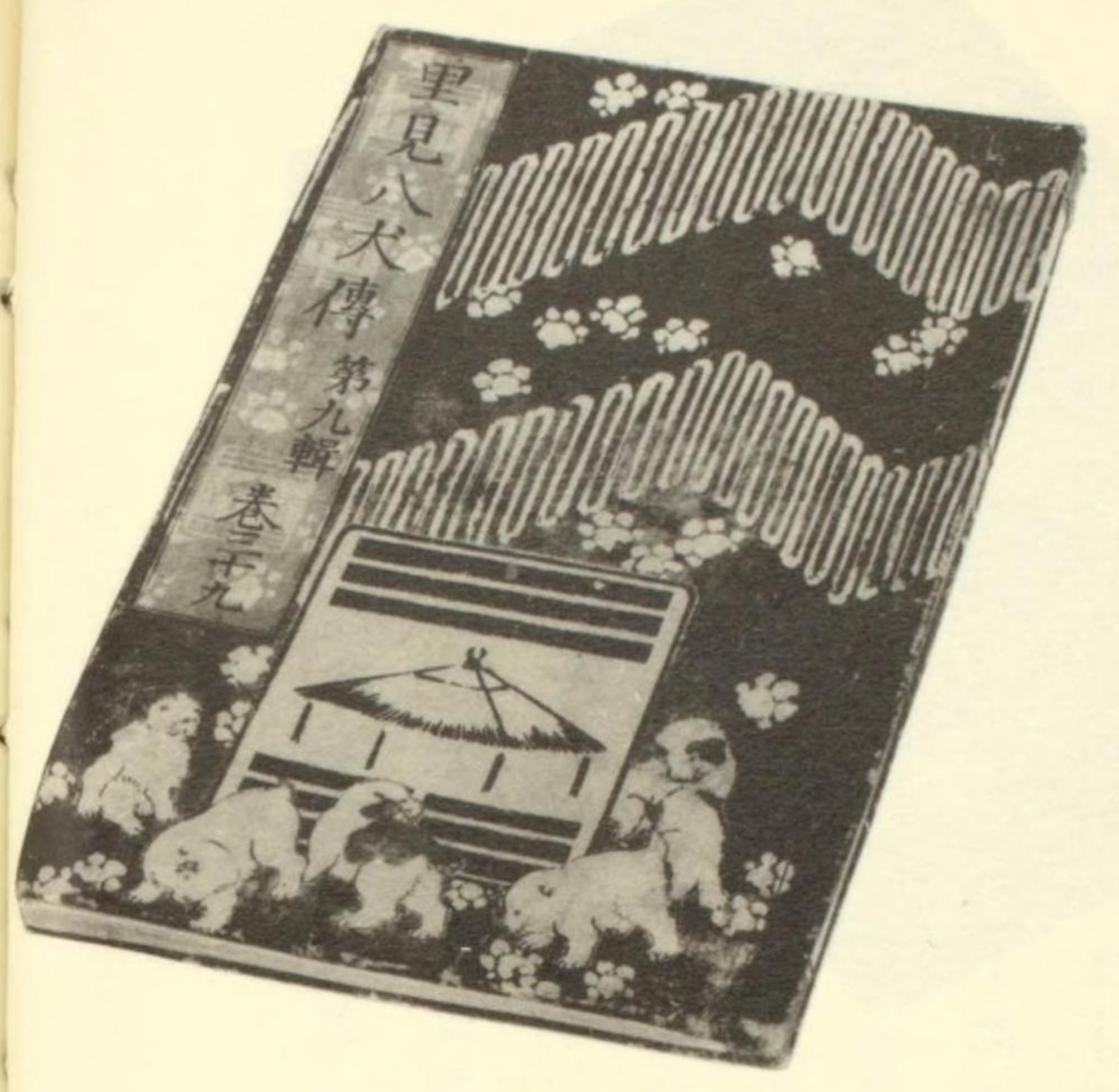
讀本稿本。當時の出版は、版元を通じて原稿を本屋行事に届け、その改めの割印を受けるのが定法で、例へば本稿第二篇初冊表紙に「子十月廿二日請取」や「十一月十一日改済」の書入は、この検閲に概ね二十日を要したことを示してゐる。

一柳齋歌川豊廣畫、江戸若林・山崎の合版で、版元は大坂の文金堂森本氏河内屋太助。全六篇、各篇五卷五册。文化十二年から文政十年まで前後十三年にわたり刊行されたが完結せず、馬琴歿後、松亭金水によつて書繼がれたが、むしろ蛇足であつた。本書の版下と刻工が江戸と上方に別れてゐるのは、刻手間が江戸より上方が安かつたからで、従て校正も京都の門人が受持つた。しかし、割印改の願人が、文金堂でなく江戸の若林となつてゐるのは、作者との地理的關係によるものであらう。

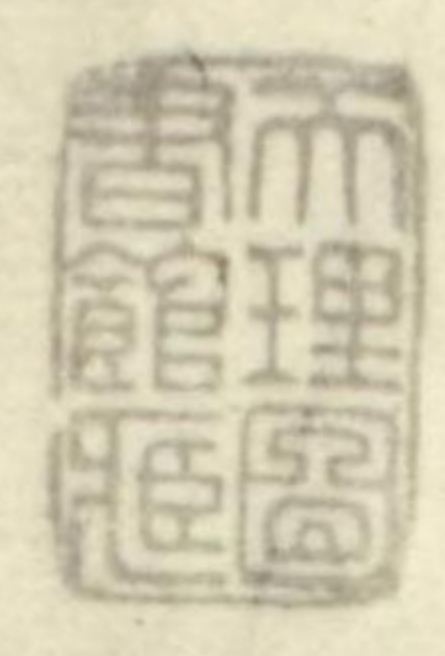
掲出本は縦二十四櫃、横十七櫃、初篇から四篇までの、半紙本計二十冊で、各冊凡そ三十枚。執筆速度一日平均三枚、下書なしのぶつつけ書きであるが、一體に美しい原稿で、推敲の個所は丹念に切張りされてある。

圖版の墨印は本屋行事改の「江戸三組書物問屋行事改印」、原寸大。

全冊曲亭主人編 九八
 南總里見八犬傳第九輯
 三十九之卷
 稿本一 五十四丁
 梓字本 或三丁
 丁子屋平兵衛板
 正板下
 西土重信

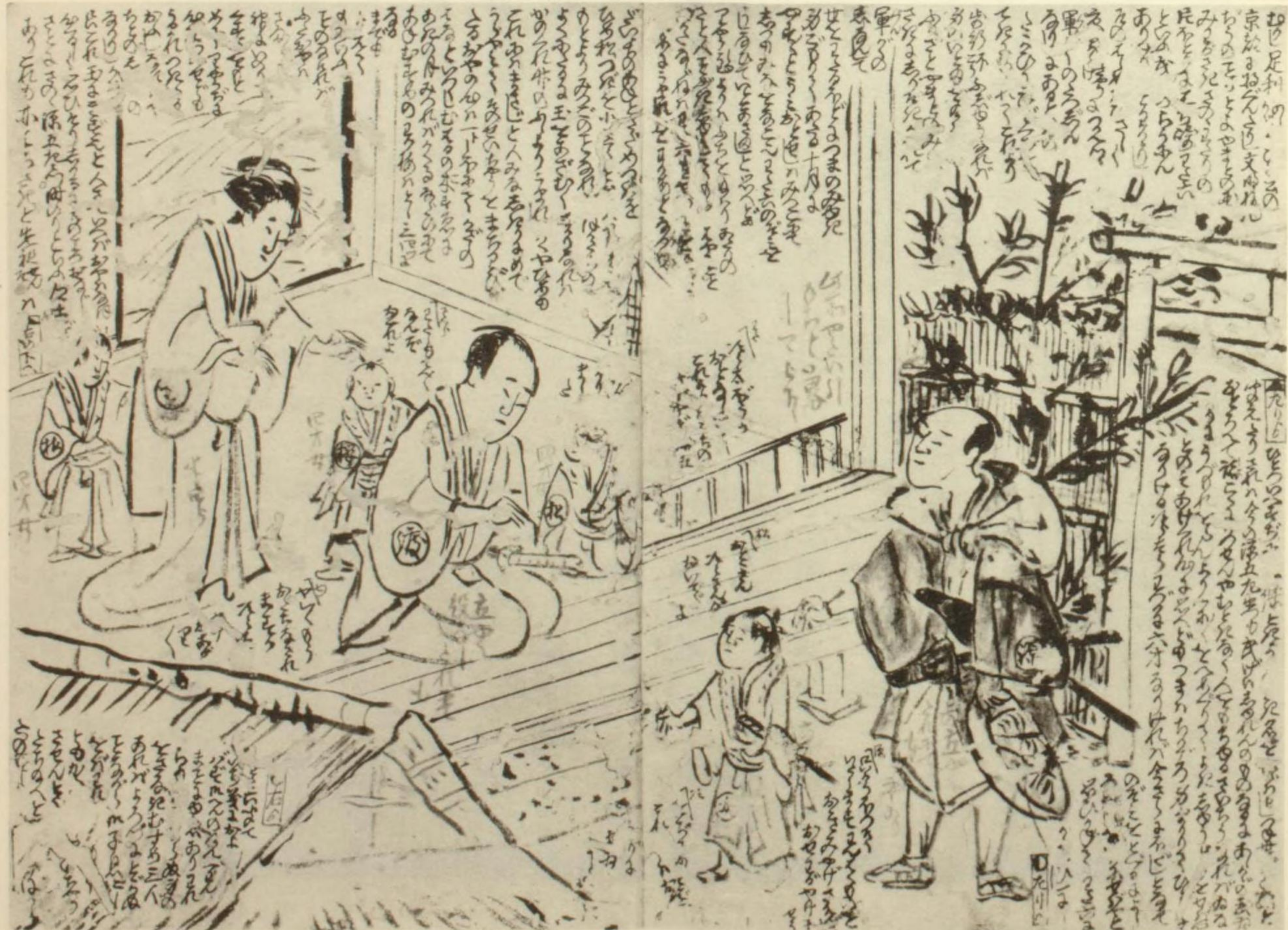
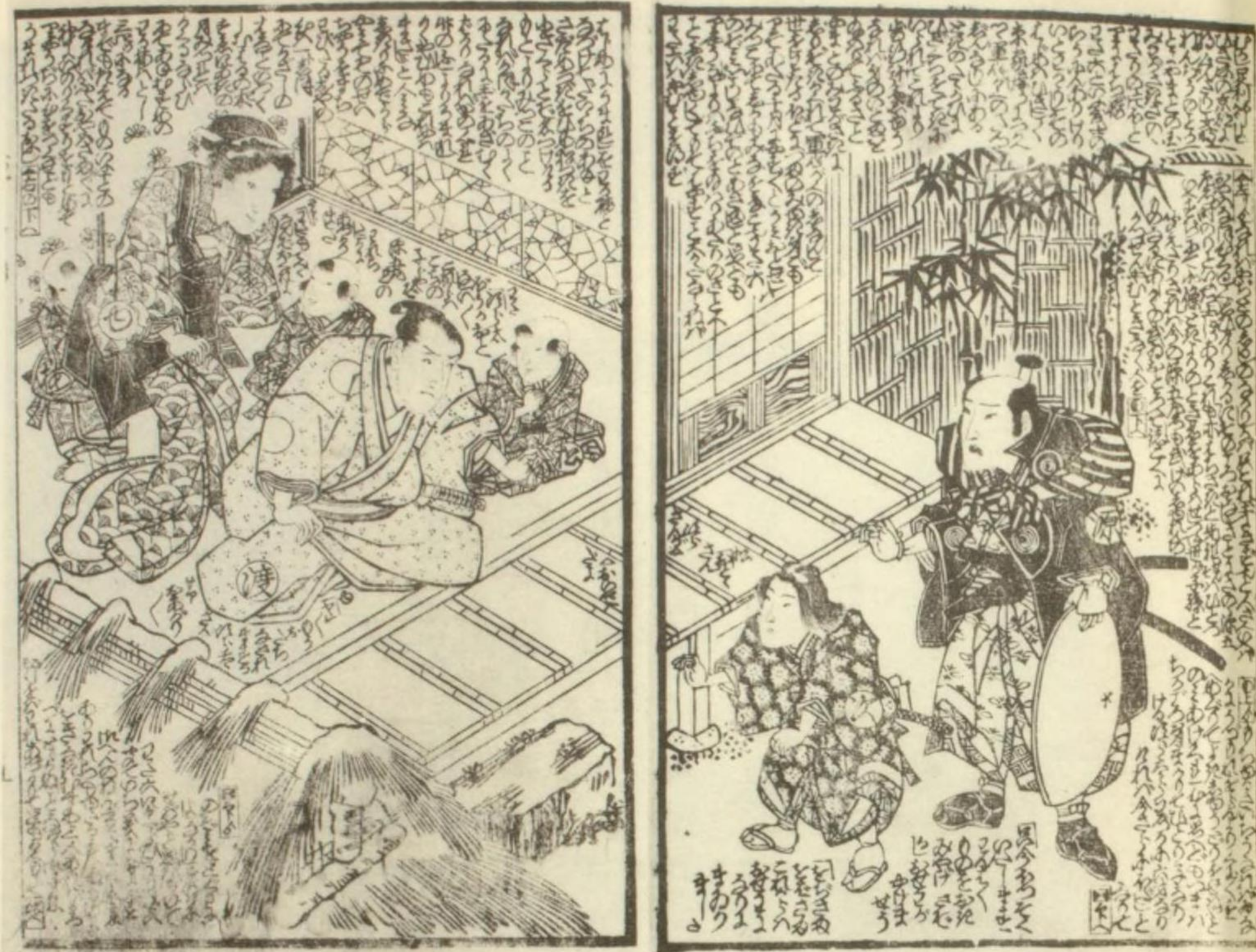


南總里見八犬傳第九輯卷之三十九
 東都 曲亭主人編次
 第百五章
 今一回之卷之巻不做き其例を以て本傳二百七十四丁之圖
 圓中より欲する故に是より一回毎に長編を以てする也
 却説大銅現八は則千個の隊の兵を馬の前後に從せし五十四丁を授
 けし程に前向せし四五千の軍あり敵隊射方快と云ふに
 隨ふ又見れば是則別人を大塚信乃成考杉倉直元等と共に
 あり現八を待てし衛現八運し一千有餘の隊の兵皆來りて隊
 中より一かき并小頭人老女們俱大銅を相迎へ信乃用意を告



南總里見八犬傳第九輯卷之三十九
 東都 曲亭主人編次
 第百五章
 今一回之卷之巻不做き其例を以て本傳二百七十四丁之圖
 圓中より欲する故に是より一回毎に長編を以てする也
 却説大銅現八は則千個の隊の兵を馬の前後に從せし五十四丁を授
 けし程に前向せし四五千の軍あり敵隊射方快と云ふに
 隨ふ又見れば是則別人を大塚信乃成考杉倉直元等と共に
 あり現八を待てし衛現八運し一千有餘の隊の兵皆來りて隊
 中より一かき并小頭人老女們俱大銅を相迎へ信乃用意を告





八 姫萬兩長者鉢木



共に姫松の菩提を吊ふ。折しも訪なふ旅の僧—實は諸國行脚の舊主伊勢新九郎の北條早雲であつた。雪の夜に鉢の木を焼く話は例の如くであるが、姫松の身替りに、早雲は自分の妹萬兩を常命に與へやうと約束—等いつた脚色過剰がいたるところにみられる。草雙紙は一冊五丁綴三巻が立前であつたが、趣向・作意の複雑化につれ、この形では收めきれず、二巻分十丁を一冊に合巻し、それを三冊一篇に仕立て、連年嗣出して數十篇の長篇となる。掲出本は縦十七・五糎、横十三糎、全三篇、各篇二巻二冊の小本で計六巻六冊。毎巻五丁の全三十丁、合巻小説としては最も短篇に屬する。第一巻を文政七年十月朔日、第六巻は十一月二十日に稿了。翌々九年、歌川國貞・美丸畫、三篇三冊、各冊十丁で馬喰町の地本問屋森屋治兵衛から賣出された。圖版は刷本とその稿本。カットは刷本下篇の表紙。

合巻稿本。三人の娘、若梅・姫松・小櫻—姉の若梅は悪人の手から助けられて伊豆の城主伊勢新九郎の奥方となり、姫松は姉を捜ねて旅に出、悪人のため鎌倉化粧坂の遊女に賣られ、不慮の死を遂げる。新九郎の家臣で姫松の許婚佐野次郎左衛門常命は、亡妻の首を持つて諸國を遍歴、ある雪の夜、武州船橋の里に隠れ住む小櫻とその老母に邂逅し、

九 驕 旅 漫 録

旅ぎらひでもあつたらしい馬琴にとつて、三十六歳の、
享和二年夏から秋にかけての關西遊歴は、その長い生涯に
於ても空前絶後のことであつた。

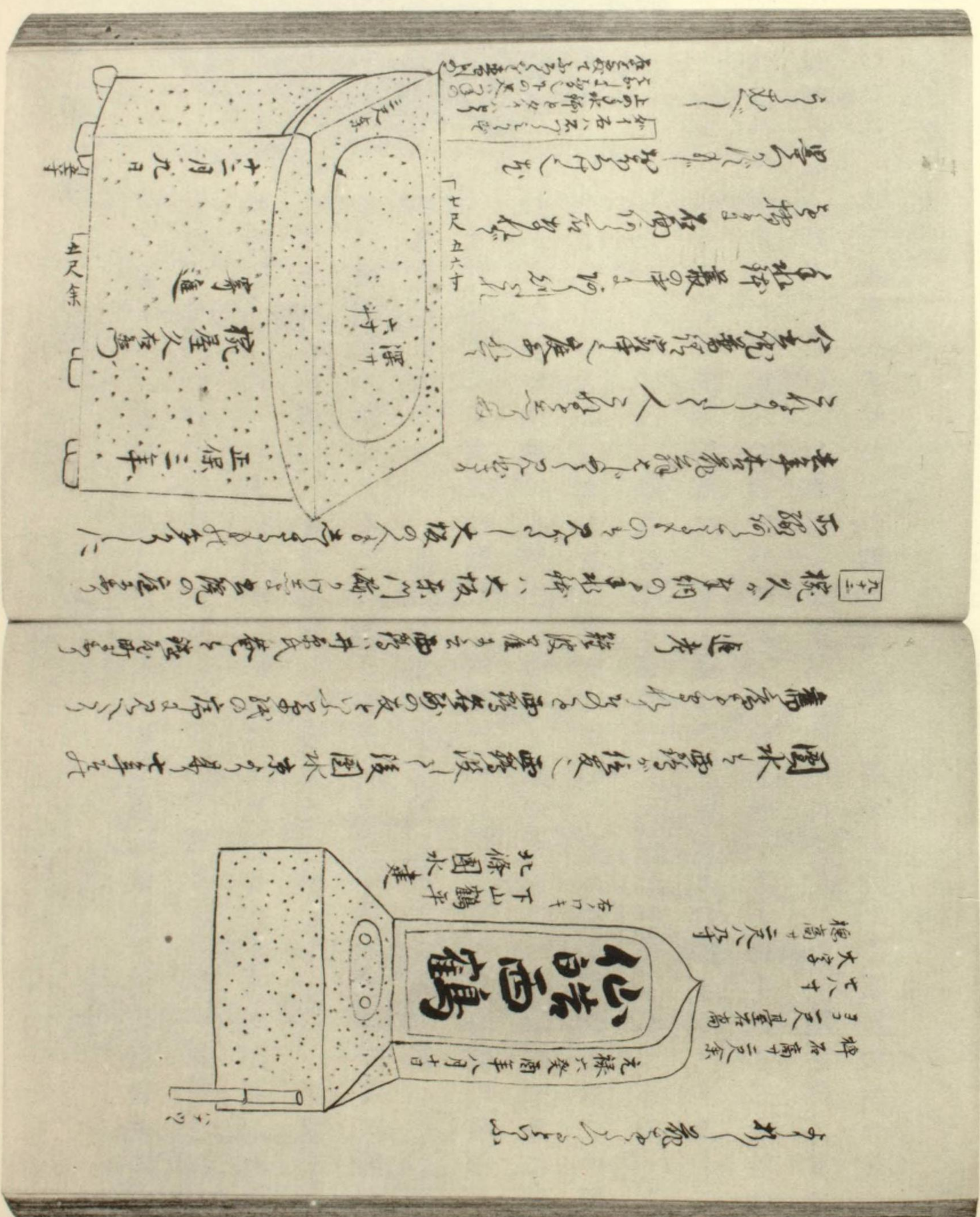
五月九日巳刻出立、名古屋を経て京都に上り、大阪に出
で、伊勢松坂を廻つて八月二十四日歸府。漫録はこの間百
有五日にわたる旅の記である。古人の略傳・墓誌・珍書・
風俗の異體・方言・妓院・雜劇・年中行事の異同・名所古

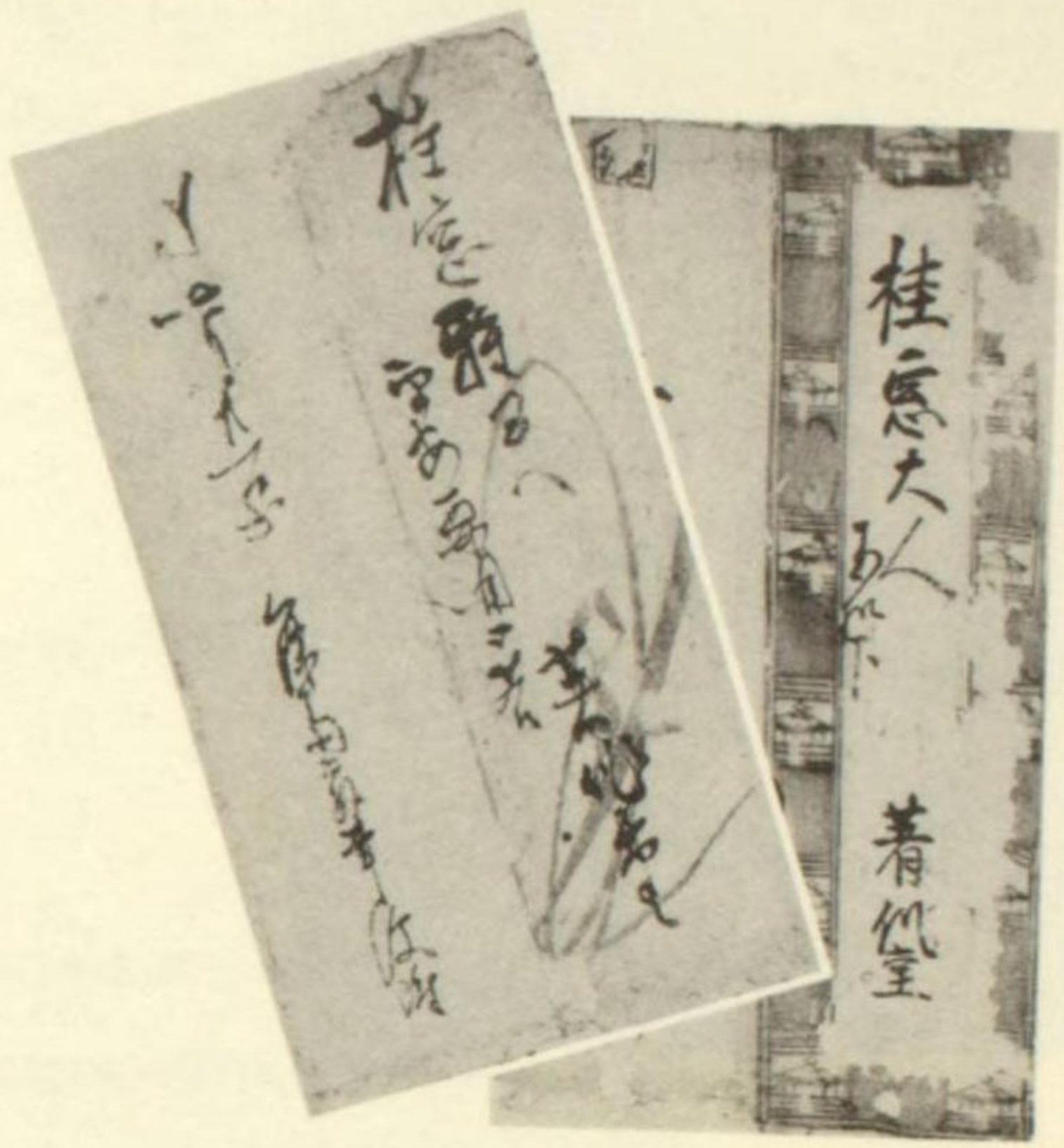
迹・古人の墨跡等、目に見耳に聞いて珍らしと思ふもの悉くを書留めたとあり、山館野亭
の風情や自然の景色には、全く興味を示してゐない。「京にて今の人物は皆川文藏と上田餘
齋のみ」など客氣ともみられるその見識は、作家的な視野と相俟つて、この遊記を一層多
彩にしてゐる。翌々享和四年、本書の何章かを抄出改訂して雨笠蓑談三冊を上梓した。

掲出本は縦二十四糎、横十七糎、百四十六枚の半紙一冊で、馬琴稿本を謄寫した西莊
本。圖版西鶴墓は、大阪の文士蘆橋庵田宮仲宣の東道で、七月晦日、井原家の菩提寺だつ
た寺町八丁目誓願寺に掃苔した際のスケッチで、本堂西の裏手南向三側目中程にあり、既
に無縁であつたといふ。印記は本書に捺された、朱、原寸大。表紙の題簽等は桂窓筆。



西 亭 漫 録





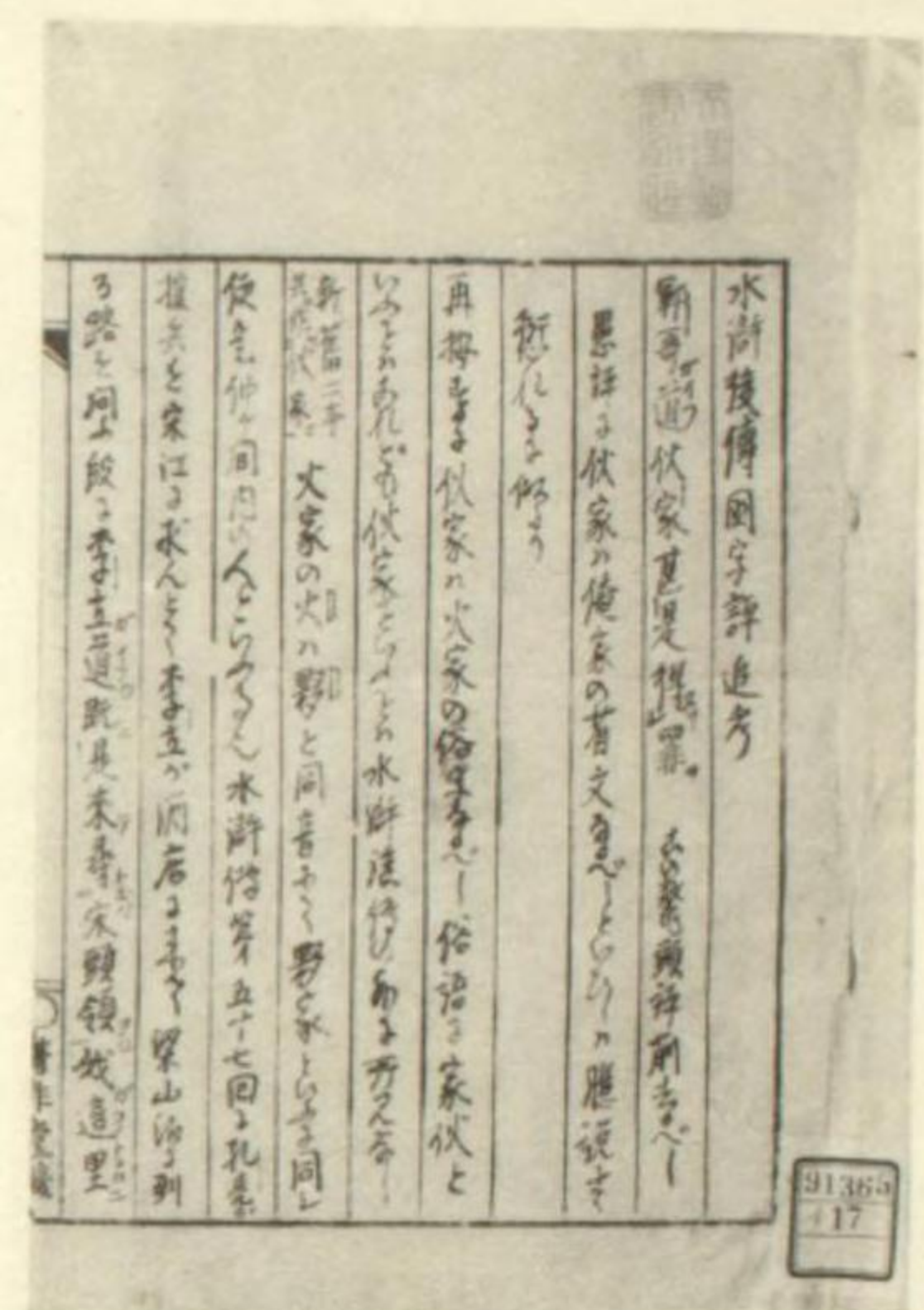
馬琴資料は、當代他の作家に比べ、殊に書翰に關する限り、保存状態はかなりよい。彼には馬琴宗ともいふべきグループが何人かあり、例へば越後鹽澤の鈴木牧之、旗本石川疊翠に高松藩木村默老、そして篠齋・桂窓等。馬琴との間に彼我書通の往返は常にも繁く、それ等のあるものは、比較的最近まで各家に傳來してきたからである。

桂窓・篠齋宛を主とした約百數十通を館藏するが、孰れも長翰で、蠅頭の文字を連ねて數間に餘り、繁忙を託ちつつその執筆に何日かを費すのも稀でなかつた。文事を論じ、身邊を傳へ、世の新聞を報ずる等、内容最も豊富である。

掲出の一翰は、天保七年十月二十六日附篠齋宛、長さ八米九十糎、一萬言を越す。篠齋は殿村氏、字は安守、桂窓に同じく松坂の豪家。書中、この年八月十四日柳橋萬八樓での古稀賀筵のこと等を詳記してゐる。書畫會の俗惡さ、その雜鬧と愚劣さを漫罵しつゝ、しかも當日の成功を誰よりも心につけ、名家の參會を數へて得々たる、凡俗の情をかくし得ぬ善良さに却て好感がもたれる。カットは馬琴書翰封筒集から。

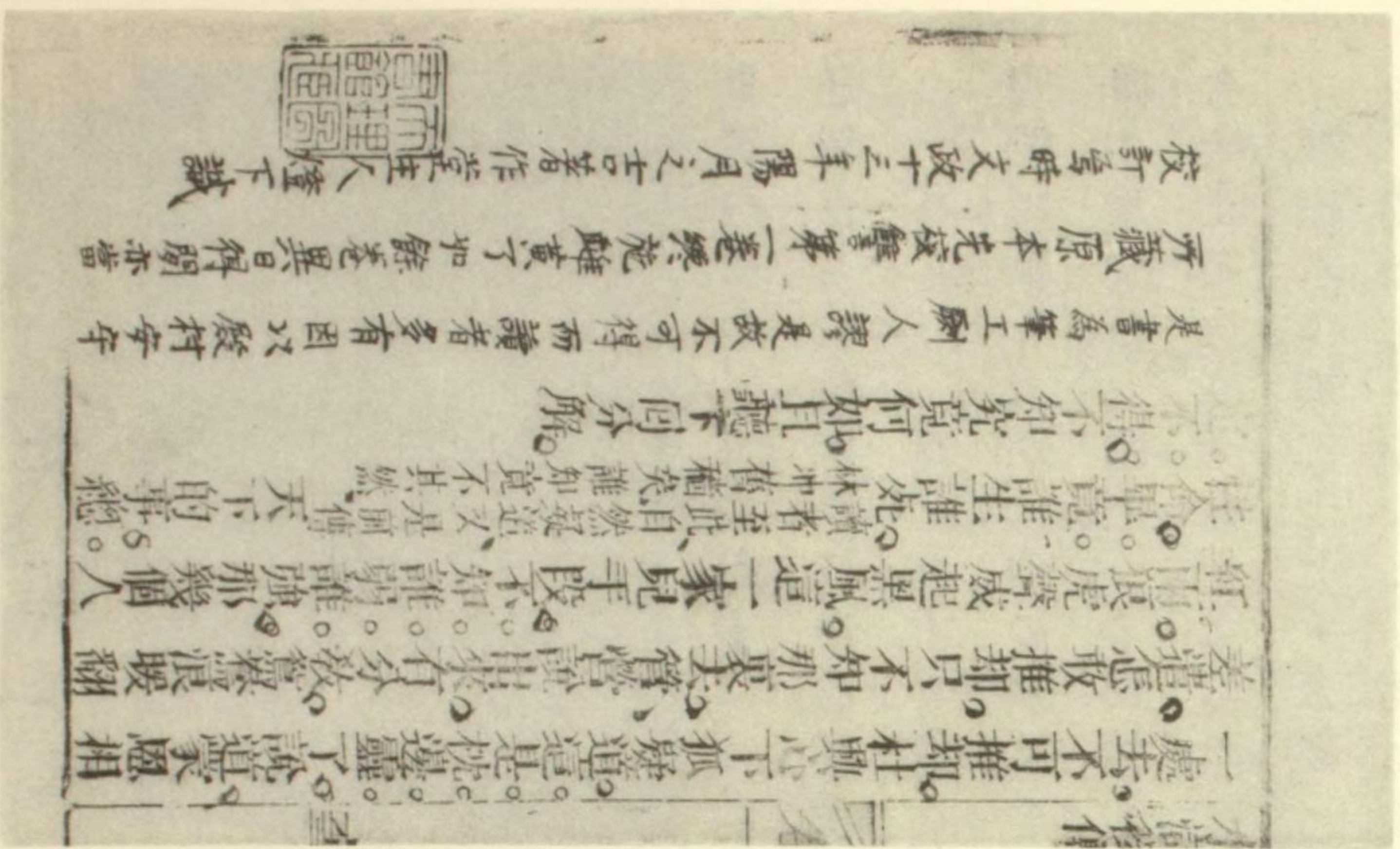
Handwritten calligraphy in vertical columns, likely a letter or a collection of notes. The text is dense and written in a cursive style. At the bottom of the page, there is a date: 天保七年十月二十六日 (October 26, Tenpō 7).

二五 水滸後傳



大坂に於て收得した。馬琴は請うて借覽し、以て家藏本に校訂、天保二年四月六日にこの業を終り、その巻末に、篠齋水滸後傳を原本或は明版と審定して、萬曆有序のことを朱識した。萬曆云々は偽序、従てこれにより明版を稱するのは馬琴の失考であるにしても、本版を著録するもの他になく、その篠齋本も既に佚した今日、彼の校勘記により纔に原態がしのばれるのみである。四月十四日篠齋にあてゝ、家藏本は以ての外の惡本故、校訂に餘程手間どり、一日に三四十丁ならでは校し得なかつたが、お蔭で外に類なき上本となつたことを謝し、別に同評書を稿し、これを贈つてその恩に酬つてゐる。

掲出本は馬琴・朱書校合書入、縦二十二・五糎、横十五・五糎、乾隆本十冊。カットは天保二年五月八日執筆の水滸後傳國字評追考、馬琴の自筆である。



水滸後傳目錄

| | | |
|-----|---------|---------|
| 卷之一 | 古宋遺民著 | 馬鞍山樵評 |
| 第一回 | 阮統制梁山感誓 | 張幹辦湖泊誼災 |
| 第二回 | 毛孔目橫吞海貨 | 碩大婢直斬蒙家 |
| 第三回 | 病尉遲前住過嶽 | 驍廷主夫機入夥 |

著作堂主人云、原本八卷、卷十、卷明齋序戊申秋、馬鞍山樵自序、并古宋遺民偶存有之、卷早堂刻時、則古書序二編、而後載、已矣、是故使原本兩篇、感不傳、不可傳也、又據原本、卷錄單、宋遺民、卷序、山樵評、如五、卷早以二名、爲一人、亦古宋遺民、若偽稱也、然、山樵、明齋、序、人、古宋、不、近、也、亦、不、致、爲、名、堂、者、是、標、可、定、

處處出光外、在說先要點、一本、打、聊、要、將、來、故、國、影、子、以、身、入、生、架、格、得、失、雖、變、能、萬、端、而、究、竟、不、過、是、一、齣、戲、文、場、裏、夢、不、足、深、較、將、本、傳、數、十、回、大、書、講、村、區、字、結、也、四、十、

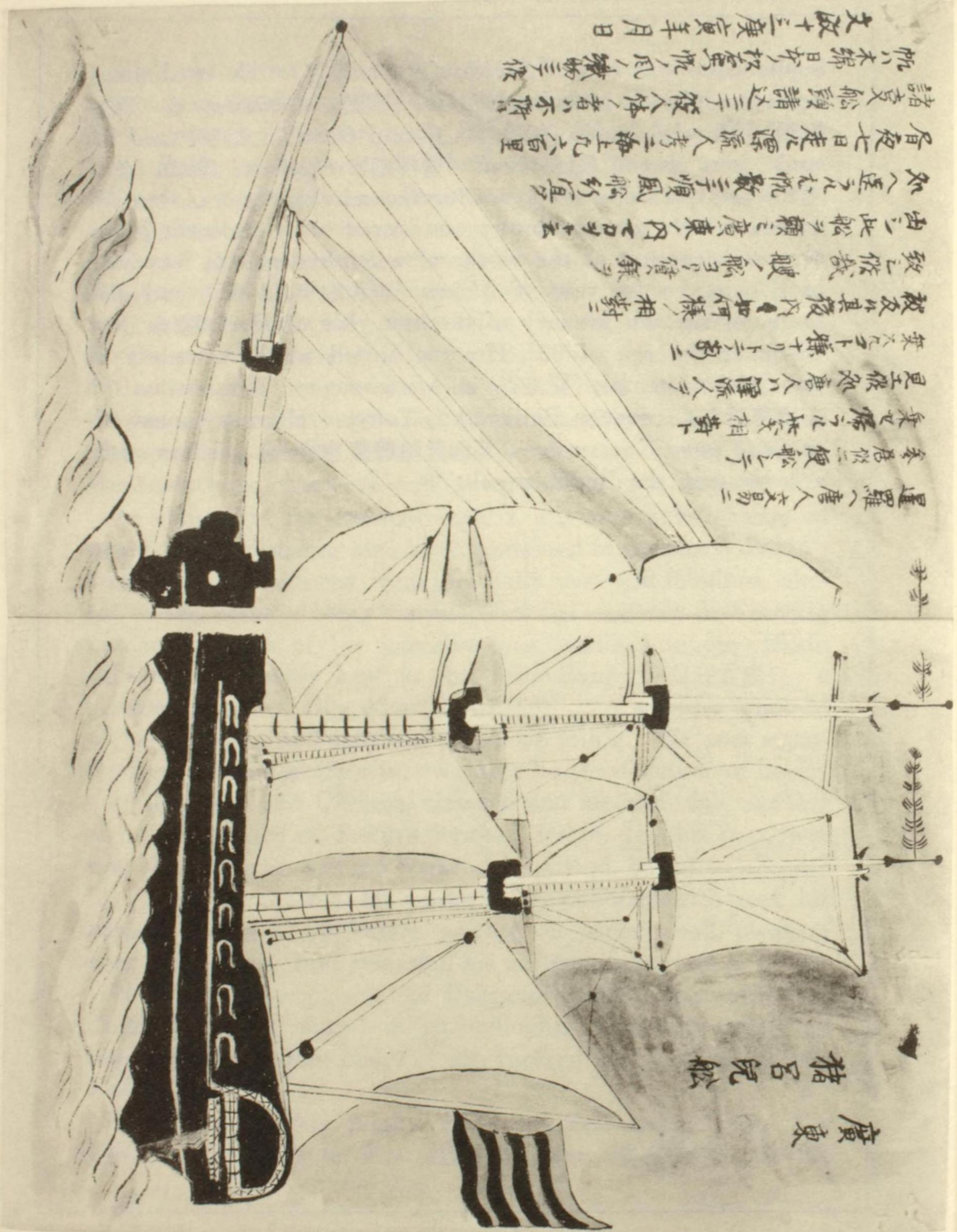
一六 聞まゝの記

衣食を節して蒐めた書物が馬琴の自慢で、家に過ぎたただ一つの贅澤でもあつた。それ等には、自ら手抄又は備書をして筆寫せしめ、題跋を識して架蔵に加へたものも少なくない。聞まゝの記もさうした備書筆本の一つである。



本書は、讃州高松の藩臣木村黙老が、馬琴にも勧められて長年に書集めた聞書で、珍説奇譚に充ち、同郷の先人平賀源内についての記事は、この才人の傳記資料として夙く著聞してゐる。黙老、名は通明、通稱亘、文政末年江戸詰家老となり、小説の類を好んで馬琴と友交が篤かつた。安政三年（一八五〇）歿、八十五歳。馬琴は、本書の成るに随ひ、天保初年より順次借寫して第十四冊に及んだが、他の多くの藏書と共に桂窓に譲つてしまつた。後年、桂窓は第十四冊以降の増加分を黙老から借覽して以下三十四冊を追補し、自ら目錄一冊を編んで、馬琴本に合せ正續全五十九冊とした。

掲出本は縦二十七・五糎、横十九・五糎。馬琴本・桂窓本共にそれごとく自筆題簽。圖版は、漂流者が寫したものを黙老から借り、天保四年七月下旬、馬琴は自筆を以て寫しとり、第五冊下「讃州津田村水主漂流兩紀事」の卷末に補綴した。かうした世界にも深い關心を彼は持つてゐたのである。



暹羅人商人交易ニ
冬居候ニ便船トテ
東ニ帰ルニ世々相替
見立候然唐人漂流人ヲ
集メテ下船ナリト云
被及外具後内ノ如何様ノ相對ニ
致シ候哉 被ノ船ヲ待銀ヲ
由ニ此船ヲ頼ミ廣東ノ内ニ泊ル
知ヘ送ルニ帆散テ順風船ノ厚
眉尺七日走ル漂流人考ニ海上九六百里
諸支船發請込ニ被入候ノ者ハ不齊
帆ハ本船目カ被是帆ノ風ノ強弱ニ依
文政十三庚寅年月日

High above the ranges of Japanese literature, two peaks are towering in the sky: one is Lady Murasaki's *Genji Monogatari*, 11th century, the other being Bakin's *Hakkenden*, 19th century. Bulky as they are, the former being 54 vols., the latter 106 vols., their greatness does not stem from their quantity, but quality. It may be said they represent the cardinal tendencies of Japanese literature respectively, i. e. *mono no aware* 'insecurity of life' and *kanzen chōaku*, 'encouraging good and condemning evil', both being literary interpretations of Buddhist nihilism and Confucian positivism. But our literary evaluation must not concern with a doctrinal problem. Rather we may say that intensitiveness and extensitiveness are the basic characteristics, which make these works the masterpieces of the aristocratic classicism and bourgeois baroque respectively.

As shown by the extensiveness, i. e., enormous variety of topics and persuading eloquence contained in the story, Bakin's knowledge and interest were unusually vast and fabulous, almost to the point of being encyclopaedic, as one can find among numerous drafts of his miscellaneous writings in our Bakin collection, originally kept in the *Seisō Bunko* (西莊文庫), a private library of *Ozu Keisō* (小津桂窓), a wealthy landlord of Ise Province and intimate friend of Bakin. He was a particularly learned gentleman, owning a large collection of books, both Japanese and Chinese, classical and modern. He was also an ardent reader of Bakin's works. Bakin, for his part, was not only eager to read the books of his friend, but often showed his friend the draft of his works before publication to seek his advice. Many of his letters, written on paper scroll, measure over ten metres, thus denoting his untiring energy as a writer.

Here we represent some of Bakin material in our collection, classified and arranged in chronological order, to supply an indispensable source material for further study of *Takizawa Bakin* (瀧澤馬琴).

Takizawa was his family name, his first name being *Kai* (解), but generally he was called *Seimon* (清右衛門). In his

boyhood he was named *Sakichi* (左吉. 瑣吉). He used many noms des plumes including *Kōmin* (篁民), *Saritsu-gyoin* (蓑笠漁隱), *Handai-chinjin* (飯臺陳人), and *Gendō* (玄同), and his studio was named *Chosaku-dō* (著作堂). *Kyokutei Bakin* (曲亭馬琴) was especially used, not for the scholarly works, but for novels, which were generally considered to be indecent literature, unbecoming of the works of a gentleman. He was born in Edo in the 4th year of *Meiwa* (明和四年, 1767) and died there on the 6th January of the first year of *Kaei* (嘉永元年, 1848) at the age of 82. He was buried in the cemetery of the *Shinkō-ji* temple (深光寺) in *Myōgadagani, Koishikawa* (小石川茗荷谷), modern Bunkyo-ku, Tokyo. He was named *Chosakudō in-yō Saritsu koji* (著作堂隱譽蓑笠居士) posthumously, according to the Buddhist cult.

TENRI CENTRAL LIBRARY PHOTO SERIES No. 21

Kyokutei Bakin

CONTENTS

Preface

1. Portrait of Bakin
2. Autograph
3. Kakogawa Honzō Kōmoku
4. Katakiuchi Tasoya Andon
5. Beibei Kyōdan
6. Asahina Shima-meguri-no-ki -Zenden
7. Nansō Satomi Hakken-den
8. Himemanryō Chōja-no-Hachinoki
9. Kiryo Manroku (Memorandum on Journey)
10. Toen Shōsetsu
11. Diary
12. Kinsei Mono-no-hon Edo Sakusha Burui
13. Nochi-no-tame-no-ki (In memoriam of Sōhaku, Bakin's son)
14. Letter to Jōsai Tonomura
15. Suiko Kō-den
16. Kikumama-no-ki (Miscellaneous Essays)

昭和三十八年七月二十日 印刷
昭和三十八年七月二十六日 發行

編輯者 奈良縣天理市 天理圖書館
京都市中京區新町通竹屋町南
印刷者 株式會社 便利堂
發行者 奈良縣天理市 天理大學出版部

善本寫真集

TENRI CENTRAL LIBRARY PHOTO SERIES

- | | | |
|-------|--|------|
| I | 日本近世名家自筆集 (Autographic documents of Edo-period in Japanese literature) | 昭和28 |
| II | きりしたん版 (The Jesuit Mission Press in Japan) | 昭和28 |
| III | 古俳書 I (Kohaisho-I: Materials of early Haikai) | 昭和29 |
| IV | 西洋古版日本地圖集 (Early printed maps and atlases of Japan made in Western countries) | 昭和29 |
| V | <small>開館廿五周年記念</small> 稀覯本集 (Collection of old and rare books and manuscripts, the 25th anniversary volume) | 昭和30 |
| VI | 滿文書籍集 (Collection of Manchu books) | 絶版 |
| VII | 近代作家原稿集 (Collection of Autographic MSS. of Japanese novelists and poets from Meiji-taishō periods) | 昭和31 |
| VIII | 小泉八雲集 (Lafcadio Hearn) | 昭和31 |
| IX | 日本史籍 (Classics of the History of Japan) | 昭和32 |
| X | 泰西日本記集 (Early Western works on Japan) | 昭和32 |
| XI | お伽草子 (Otogi-zōshi: Nursery tales of Muromachi-period) | 昭和33 |
| XII | 獨逸文人自筆集 (Autographs of German literati) | 昭和33 |
| XIII | 古俳書 II (Kohaisho-II: Materials of early Haikai) | 昭和34 |
| XIV | 百科事典 (Encyclopaedias) | 昭和34 |
| XV | <small>開館卅周年記念</small> 善本聚英 (Collection of old and rare books and manuscripts, the 30th anniversary volume) | 昭和35 |
| XVI | 紀行航海記集 (Collection of Travels & Voyages) | 昭和36 |
| XVII | 永井荷風集 (Nagai Kafū) | 昭和36 |
| XVIII | インキュナビュラ (Incunabula) | 昭和37 |
| XIX | 宋版 (Sung Editions) | 昭和37 |
| XX | 地球儀・天球儀 I (Terrestrial and Celestial Globes-I) | 昭和38 |
| XXI | 曲亭馬琴 (Kyokutei Bakin) | 昭和38 |